イザナキ・イザナミ神話に関する二三の考察

福島秋穂

私たちが神話と称する物語は、超自然的存在態を登場主体とし、其の展開が、空間的にも時間的にも、現実世界の其れを超えたところでなされる場合が多いのであるが、其れが所詮人間の頭脳から産み出されたものである故、物語展開が如何に非現実的であるとは言っても、結局のところ、其の創作者たる民衆の日常生活や現実世界に於ける経験を表現したものに過ぎないと言える。即ち、神話の非現実性は、其の創作者たる民衆の経験した現実の延長線上に位置する非現実であって、現実世界と全く断絶した超現実であることはない。其の意味で神話とは、其れが如何に荒唐無稽のものであるにしても、何処かで現実の世界と何らかの関りを有しているものだと言える。

*　　*

我国の文献載録神話は、完全無欠、凡ゆる民間伝承を網羅して成ったかの如き観を呈しているが、実際には、其れが文献に記載される時期に、神話の原創作者たる民衆の意図を全く無視して、編集改竄の手が加えられたため、ギリシア神話が詩人たちの手で美化されたのとは異った意味で、其の原初形態を正確に今日に伝えたものとは言えないのである。抑々、神話は、其の発生時期や創作者たちの文化程度といった事柄から考え、本来単純素朴にして断片的なものであったに違いないのであって、我国の文献載録神話の如く、物語展開が時間経過に従い、しかも首尾一貫している神話は、其の原創作者たちの手を遠く離れてしまったものであると言える。従って、私たちが我国の文献載録神話から、其の原創作者たちの思想や神話創作の意図を推し測るためには、其れ相当の注意と努力が必要とされる訳である。

此の度は、我国の文献載録神話の中より、イザナキ・イザナミ二神を登場主体とする神話を採り上げ、其の中でも特に原創作者たる民衆の思想・生活慣習を今日に伝えていると思われる物語構成要素の二三について考察し、其れが本来民衆の間で如何なる意義を有するものであったのかを考えてみたいと思う。

*　　*

我国の文献載録神話、特に記紀の冒頭部からかなりの部分に亙って展開されるイザナキ・イザナミ二神の神話に関しては、古来種々の方面から考察がなされてきたが、此処ではまず、此の二神

の名義・実体を原創作者たちが如何に考えていただろうかという基本的な事から考察を始めてみよう。

イザナキ・イザナミ二神の名義を如何に解するかについて、此れまでに唱えられた説は数多いが、其の主なるものは略次の三種に要約出来る。

第一は、文献載録神話に見える二神の婚姻譚を論拠に、「伊弉は誘の語、那は発語、喜は牙に当る。音陽なり。美は唇に当る、音陰なり。男神女神の称なり」[註1]とする説以来のもので、イザの語を「誘う」の意とするか、或は間投詞とするか、細部に多少の意見の相違は見られるが、宣長・篤胤をはじめ多くの人々により支持・主張されてきた説である。[註2]

第二は、「イサといふ地名は天上にもあり、またこの大八洲国にも韓郷之島にも広く分布してゐるから、伊弉ノ諾命・伊弉冊ノ命二柱の神の御名は、これを「イサのアキ」即ちイサ国の男神、「イサのアミ」即ちイサ国の女神と解いて、亜細亜大陸をも包含する広い意味の国土生成の大神であることを主張するものである」[註3]と言う如く、二神の名義を地名に起源すると説くもので、新井白石なども其の先唱者の一人である。[註4]

第三の其れは、「イザノアギ・イザノアミの約。神聖の男君、神聖の女君の意」[註5]とした松岡静雄説に代表されるものであり、松村武雄博士の説[註6]も略此れと同様である。

以上三説の他に、イザナキ・イザナミ二神の名義に関し言及している説を見るに、梵語[註7]・満洲語[註8]・東南アジア諸語[註9]・琉球語等[註10]、日本列島外の諸国語に其の語源を求めるもの、イザナを「石な」とするもの、「草創の男女神」であると説くもの[註11]、「率先」の男女と主張するもの[註12]、「水之陽神・水之陰神」とするもの[註13]、「鐸」と解するもの[註14]、「サ」を中接語として「稲木・稲実」とするもの[註15]、鯨を指表する「イサナ」の語と結び付けんとするもの[註16]、「磯凪・磯波」と言うもの[註17]等々、種々雑多である。[註18]

＊　＊

叙上の諸説、就中第一－三の説は、孰れも一面の真理を有し、恐らく其の原命名者たちも其の孰れかを念頭に置いていたのではないかと考えられるのであるが、私としては、今日私たちの眼にするイザナキ・イザナミ両神の登場活躍する神話が、明らかに幾つかの物語構成要素を取捨選択・変改接合した結果であることを考え合わせ、其の神名が一般民衆の間で古い時代に命名されたものであるとする限り、両神の文献載録神話に表現された性格・行動の凡てに合致するような神名の解釈は、当然排すべきであると思う。特に、神聖なる男女神と唱える説など、一見合理的な解の如くに考えられ、確かに「イザナギ・イザナミの名の義に関しては、これを「神聖なる男君」・「神聖なる女君」と解するのが、今のところ「無理な感じ」の抵抗を最も少く感ずる」[註19]のであるが、其れはやはり両神の発生原初段階に、其の創作者たちの意識したものであるとは考えられない。或る時期、古代人の間で叙上の如き解がなされたにしても、其れは比較的後世のことであり、両神の神話を構成する各物語要素が未だ互いに独立無縁のものとして存在していた頃、或はそれぞれの発生原初段階に於いては、此の二神を神聖視することが果して一般民衆の間に行われていた

かどうかも疑問である。地名による命名説にも捨て難いものがあり、また其の他の諸説を排するに充分な確証を挙げることは出来ないが、私は、口訣以来の「誘う男」・「誘う女」など、かなり古い時期に於ける命名であると考え、此の説を採りたい。ただ、神話の口頭伝承の間に、次第に其の登場主体の名義に対する解釈が変り、同時に其の神名の解釈に基き、別の全く新しい神話が創作されるというようなことは当然あっただろう。

記紀編纂の事情や口承文芸一般の性格から容易に理解出来る如く、今日私たちの眼にする我国の文献載録神話が、幾つかの物語構成要素の集合体であり、絶えず他の要素を摂取し、成長変化したものである故、イザナキ・イザナミ二神の名も、本来此の二神が登場活躍する神話構成要素の孰れかと結びついていたものであり、神話編纂時には、別の男女神の神話、或は単なる男女の物語を、イザナキ・イザナミ二神の名の下に統一合成するようなことも行われただろう。其の意味でも、此の二神の名義を考える際、其の本然の姿を求めんとするのであれば、其れが現存の神話構成要素の孰れか一個を満足させれば、其れで良いのではないだろうか。

* *

次に此の二神の実体が、其の創作者たちにより如何なる存在態と考えられていたのかということであるが、此れも前記した名義の場合同様、現在までに提出された説は、単に男女神と考えるものをはじめ、天地神とするもの[注20]、「岩石を以て表象されてゐた神」[注11]、水神、漁師[注21]、鈴の神[注15]、鯨神[注17]等と解するもの、とりどりである。

二神の実体を如何に解するかということは、其の名義の解釈の仕方にも関りを持つ問題であるが、名義を云々するのみで、特に実体に関し言及していない説など迎えて解釈すると、現在のところでは、二神を単に男女の神と解する説がほとんどである。私も現在此の二神は、普通の男女神、其れも本来は人間であった者が、民衆の間で何時しか超自然的力能を有する神的存在態にまで昇華したものと考えるのが良いと思っている。

紙数の都合上他説を逐一俎上に載せ、検討批判する訳にはいかないが、叙上諸説のうちイザナキ・イザナミ二神を天父地母神と解する説についてだけは、其れがかなりの論拠に立脚するものであるだけに、少しく言及しておかねばなるまい。

イザナキ・イザナミ二神を、天父地母と解する説は、文献載録神話に見られる太陽と月がイザナキ神の両眼より化生したとする話、イザナミ神が多くの場合、地下界と関りを有することなどに直接の論拠を置く説であるが、

天と地はもとは一つの山であったが、その山の土台が地上となり、その頂上は天となったのであるという。そしてこの天は擬人化されてマンという神になっており、地は女神キイになっている。[注22]

というメソポタミアの神話に見られる如く、天を父、地を母と見做し、原初其れらが分離して今日に至ったのだと説く所謂天地分離神話が、世界的な広がりを見せ、インドから東南アジア・メラネシアと、我国の神話に何らかの影響を及ぼし得ると考えられ、現実に、文献載録神話の構成要素中の幾つかが、其処から我国へと伝播したものであるとされている地域も、其の例に漏れない

故、我国のイザナキ・イザナミ二神も、天父地母と解し得るのではないかと説くのである。

我国の文献載録神話に登場するイザナキ・イザナミ二神の性格・行動を眺めると、其処に天地神としての色彩がかなり見られることは確かである。しかし、此の二神の凡てが、所謂天地神の性格と完全に合致する訳ではない。此の二神を強いて天地の象徴とせずとも、充分理解し得る神話が多く見られるところに、此の説の難点があるように思われる。そして何よりも大事なことは、前にも述べた如く、我国の文献に載録されている神話が、今日私たちの眼にする如き形で発生し、其の始めより些かの変化もせず伝承されていた訳ではないという事である。完成した神話全体を満足させる形で、其の登場主体たる神的存在態の名義・実体を定めることが、其の本然の姿、其の原創作者たる民衆の思想に、より一層接近することになるか、私は甚だ疑問であると思う。

神話は、本来が民衆の生活経験を基礎に、単純素朴な形態で産み出されたものであり、其れが時の経過と共に成長変化したものである——我国の文献載録神話には、編纂者による編集意図が加えられているので、此の傾向は一層強まっている——故、其の原初的形態と関る諸問題を解明せんとする場合は何時でも、一度其れを各構成要素に分解し、然る後に考察を加えるべきである。イザナキ・イザナミ二神の実体も、其の意味で、本源的にはやはり、今日私たちの眼にする二神の神話全体に共通するものではなかったと考えて良いだろう。そして、強いて其の実体を明らかにせよというのであれば、私はやはり、其れが最初民衆の間で生れた時には、天父でも地母でもなく、未だ超自然的力能を保有せぬ人間の男女、即ち民衆と全く同じ存在であったと考えたい。[註23] つまり、イザナキ・イザナミ二神の神話は、一組の男女の物語が存在し、其れが核となって、他の男女の物語を摂取するのと同時に、或る時期其の主人公を神的存在態に昇華させ、最後の段階で神話編纂者の手が加えられ、文献に採録されたものなのである。

* *

イザナキ・イザナミ二神の名義・実体を如何に解するかということで思わぬ紙数を費してしまったが、次に此の二神が、天父でもなければ地母でもなく、正しく人間としての性格のみを見せている神話——前後の物語から独立させてみると、其れは、主人公自体が何ら超自然的性格を有していないので、未だ神話とも言えないようなものである——を採りあげ、其れが未開人にとって如何なる意義を有するものであったのか、其れは我国自生の物語であるのか、或は他から伝播して来たものであるのか、もし伝播であるとすれば、其の原発生地は何処であるのか、其れは文献載録神話の中で如何なる働きをしているのか、等々のことを考察してみたい。

* *

我国の文献載録神話によれば、天上界よりオノゴロ島に降ったイザナキ・イザナミ二神は、国土を生成するため結婚をしたとされている。出産による胎児の出現と国土の発生という全く異なる性格のものを結び付けて考える事は、類似事象を直結する未開人的発想の好例であるが、此の結婚を、周知の如く記は、事前に二

神の間で種々の遣り取りがあったとしているものの、最後には、身体上の相違に気付いた二神が、性行為をなしたと極く簡潔に記し、多くを語っていない。一方、紀では二神の結婚が、本文・一書の第一・第五・第六・第十と、都合五個処で語られ、此れらの記事のうち一書の第五以外は、記同様、

1　男神が女神に、其の肉体構造の如何を問う
2　女神が其れに答える
3　男神も自らの肉体構造を説明、女神に婚姻せんともちかける
4　二神は婚姻して夫婦神となる

の四個の話柄を有しているか、或は「二神合為二夫婦一」（一書の第六）、「陰神先唱曰、妍哉可愛少男乎。便握二陽神之手一、遂為二夫婦一」（一書の第十）とだけ記され、物語の構成から見て明らかに同一グループに属しているのであるが、残る一書の第五のみは他と異なり、

陰神先唱曰、美哉善少男。時以二陰神先一言故為レ不レ祥、更復改巡。則陽神先唱曰、美哉善少女。遂将二合交一而不レ知二其術一。時有二鶺鴒一飛来搖二其首尾一。二神見而学レ之、即得二交道一。

と、超自然的存在態として当然何事にも通じているはずの男女二神が、婚姻せんと決心したものの、其の方法を知らず、鶺鴒に教えてもらったとしている。

原初の男女――我国の場合は神々――が交合の法を知らず、他より教授されたとする話は、我国の文献載録神話のみに見られるものではなく、今日では、我国の近隣諸国にも幾つか同様のものの伝承されていたことが知られている。

非常に良く似た内容の話が、自然環境・在住民族等の異なる二つ以上の土地で伝承されている場合、それらの伝承が各々自生したものであるのか、或は一個の源発生地から他へ伝播したものであるのか、ということは、極めて興味ある問題である。

私たちが此処で、人間或は神的存在態への動物による交合法の教授という話柄が、各伝承地で独自に発生したのであるか、或は何処かで最初に発生したものが、順次他地域へ伝播をしていったのかを考察してみることは、イザナキ・イザナミ二神を登場主体とする神話の構成、延いては我国の文献載録神話全体の構成を理解するに無益ではないと思われるので、暫らく紙面を割いて、其の事に当てることにしたい。

松村武雄博士は、早く其の著『日本神話の研究』中に、「鶺鴒からの交道学び」なる一項を設け、鶺鴒を指表する日本語の諸方言から考え、我国では鶺鴒を性交・生産の観念で把握しているとして、私たちが現在考察の対象にしている神話が、我国独自のものであるか、それとも他の地域の類似伝承と伝播関係を有するものであるかという問題について、「諸冉二神がこの鳥の尾振りによって交道を学び知り給うたとする神話的伝承は、強ちこれを他の民族の類同した説話と結びつけて考へる必要はなく、日本民族自身の想案したところの民間説話に由来すると推断していいであらう」[註24]と、我国に於ける自生説を主張された。しかし私は、此の神話と他地域の伝承との間に見られる類似性や、我国の文献載録神話全般が、我国内に於ける自生というより、他からの伝播によ

る場合の多いことから推して、此れも我国で独自に発生したものではなく、日本列島以外の地域に発生したものが我国に伝播したものであると考えている。そこで今一度、松村博士の挙げられた台湾の類話が、伏字をし、記紀の言葉遣いで伝承を表記するなど、民間伝承採集の観点からすれば、些か価値を減ずると思われる書物から引用されているので、其れを博士の引用されたものより少しく詳細に記録している文献から採り、其れに博士の引用されなかった類話を加え、順次列挙しながら、其れらと我国の文献載録神話に見られるものとが全く無縁であるかどうか確かめてみることにしよう。

まず台湾では、阿眉族海岸蕃の伝承として、

両神ハ薯ヲ焼キテ食ハンモノト互ニ躊躇シテ火ノ側ニ在リシガ見レバ一人ハ腹ノ下ヨリ長ク出デタルモノアリ他ハ之ニ反シテ凹ミテ其形ヲ失フ不思議ノモノヨト思ヒツツ互ニ余念モ無カリシガ其時「ホワック」ト称スル鳥二羽飛ビ来リ尾ヲ振リツツ重ナリ合ヘリ両神ハ始メテ遘合ノ道ヲ知リ其後数年ナラズシテ子孫繁殖シ……（以下略）[註25]

という話が採集されており、同じ台湾の大么族蒿拿餌蕃では、此の話同様、

一日マブタ己ガ一物ニテ女ノロヲ衝キシニ気息通ゼズトテ之ヲ吐キ出セリソレヨリ耳ヲ衝ケドモ入ラズ或ハ肛門ニアラズヤト試ムルモ心適カズ斯ル中ニ二匹ノ蠅飛ビ来リテ重ナリ合ヒタレバソヲ真似テ始メテ和合ノ道ヲ知レリ[註26]

と伝え、沙績族内太魯閣蕃に於いても、また、原初男女が交合の方法を知らなかったが、

二匹ノ蠅飛ビ来リテ重ナリ合フ両人之ヲ見テ……（中略）……陰陽相和スルノ道ヲ知リ間モナク子ヲ孕ミテ子孫ヲ儲クルニ至リ我等ノ歴史ハ其時ヨリゾ始マレル[註27]

と伝承していたことが報告されている。

原初の男女が交合の事を知らず、動物の行為を見て其の知識を得たとする叙上の如き話は、台湾では略全島に亙って分布しており、交合の法を教授した動物も、ほとんどの場合蠅とされている。我国の神話と台湾に於ける伝承の相違は、此の動物が一方は鶺鴒であり、他方は蠅とされている点だけである。従って、紀に載る神話と台湾の伝承との類似という事実からだけでも、其れが単なる類似という程度のものではなく、酷似していると言っても良い程に似通っているので、私たちは、我国と台湾の間に、孰れか一方から他方へという伝播の関係が成立するのではないかと疑いを抱かざるを得ないのである。

更に、此の伝播性を濃厚ならしめるかの如く、台湾と我国とを結ぶ線上に位置する沖縄に於いても、

最初の人兄姉此の国に降りて来て海岸で貝を拾つて生活して居つた。或る日海鳥が来て、その首尾を揺かすを見て彼等は交道を知つた。[註28]

と言い、或はまた、

最初の人兄姉此の国に降りて、或る緑の芝生の上に日なたぼつこをして居つた。そこに二匹の雌雄のバッタが飛んで来て、背中合をした。姉此を見て弟の注意を呼び起して云ふ

「あれ御覧吾等もあゝやつて見よう」と、弟是を諾してその通りにやつた。それから人間界に交道が始まつた。[註29]

と伝えているのである。更に加えて、日本列島在住のアイヌ民族の間では、原初に於ける男女二神の出現譚に続けて、

何処ともなく、雌雄の鴛飛来りて、彼二神の御前にて交合の事を成しけるに、二神も其術を得て国土萬物を悉く造成し給ひ、終に大虚を指して去給ふ[註30]

と伝えていたことが、鈴木重胤の『日本書紀伝』に、伊勢の人松浦某の筆記を報告するという形で載せてある。また此の他にも広くアイヌ人に、日本民族同様、原初の人間が交合の術を知らず、鶺鴒から其れを教授されたとする話の伝えられていたことは、「鶺鴒は或人之をオチウチリ Ochiuchiri と呼ふ即情慾の鳥と云ふ義なり此鳥は情慾深きに因り其名を得たるなり神人間を造り此世界に置き給ひし後鶺鴒彼等に来り子孫を生殖するに必要なる夫婦の為すべき務を教へり此鳥の親切なる教に由り人間は此世界に於て蕃殖せり[註31]」という記事や、「鶺鴒(せきれい)をオチウチウチリ、オチウチリ、オチウチウチカプなど呼ふのは、アイヌも此鳥によつて神人交媾を覚つたからだと云つてある。[註32]」という記事等から窺い知ることが出来る。

以上見られる通り、台湾・沖縄と日本列島内に同居する日本民族及びアイヌ民族と、全く同じとも言える内容の伝承が分布しており、しかも其の伝承地が互いに地理的に見て、非常に近い位置にあることを考えるならば、其の採集記録時が不同であるところに比較上些かの難点が認められ、話の構成自体が極めて簡単なものである故に、其れが民心同似作用に基づく単なる類似であると考えられないこともないが、やはり私たちは此の類似を全くの偶然によるものであるとして片付けてしまったり、紀載録の伝承を他地域からの輸入物ではないと断定したりする訳にはいかないだろう。此の場合私としては、我国文献載録神話の構成要素の多くが、諸外国からの伝播によっていることを考慮するならば、鶺鴒の動作と性行為を結びつけて考えることは、松村博士が自説展開に援用された鶺鴒を指表する「尾振り」・「嫁学鳥」の如き我国の諸方言や、「ニハクナブリ」・「ニハクナギ」等の古語から考え、確かに我民族に独自のものであろうが、やはり紀に載録された鶺鴒による交道学びの神話も、他地域からの伝播によるものと考えるのが順当であるように思う。それでは、此れら内容を同じくする物語の原発生は、台湾・沖縄・日本列島孰れの地に於いて起ったのであろうか。それとも私たちは、叙上の地以外に其の原発生を求めるべきであろうか。

結論を先に言えば、私は現在のところ此の物語の原発生地は、イザナキ・イザナミ二神の神話を構成する物語要素のうちの幾つかのものがそうであるように、東南アジア付近にあるのではないかと考えている。

其の論拠は、此れは前記した松村博士の論説に引用されていない話であるが、マレー半島在住のシマング族の間に、

初の男と女とはどうして子供を得べきかを知らなかつたが、ココナッツ猿によつて教へられた。[註33]

という伝承の存在したことが報告されていること、我国の文献載

録神話を構成する諸要素のうち、他地域からの伝播、特に南方世界からの伝播であるとされるものの多くが、東南アジア・台湾・沖縄・日本列島という経路で輸入されたと見られる節のあること、の二点である。

原初此の世に登場した人間或は神が、子孫を得ようにも其の方法を知らず、他の動物に教授して貰ったという話は、未開人にとって一種の事象説明譚としての意義を有したものであり、人間の生死或は天地の存在同様、特に他と異なる環境になくとも、未開人の間では極めて自然に生まれ得るものである故、更に詳細な調査をすれば、我国の伝承や台湾・沖縄・マレー半島の話等と類似するものが発見される可能性は充分にあると考えられる。其の時まで私たちは、叙上の話柄が、東南アジアの何処かから、大陸の海岸沿いに、交合の術を教授する動物を、其の土地土地で日常良く眼にすることの出来る存在に変えながら北上し、台湾・沖縄を経由、最後に日本列島に入り、一個の民間伝承として存在していたのを、神話編纂者が、男女の婚姻→国土の生産という未開思想に立脚する一連の神話群の前部に配置したもの、其れが今日私たちの眼にする紀載録の神話であると考えた方が、其れを我国自生のものとするより良いだろう。勿論、此の神話は、其れが我国に伝来した最初の時点から、イザナキ・イザナミ二神の物語として存在した訳ではなく、男女二神を登場主体とする神話、或は人間の男女の物語が成長発展していった或る時期に、其れと関連するものとされるようになり、其の結果男女の登場主体が、イザナキ・イザナミ二神とされたのである。

神話に登場する神的存在態が、決して完全無欠のものではなく、神話が其の発生原初形態に近ければ近いほど、登場主体たる神が、男女交合の道すらも知らぬ人間的存在、というよりむしろ人間其のものであることを、私たちは此の神話から知ることが出来る。つまり神話は、民衆の生活経験を延長拡大したものに過ぎないのである。

*　　*

私たちは、叙上の交道学びの神話を考察することから、神話というものが神的存在態を登場主体とする物語であるにも関らず、極めて人間的なものであり、一見人間世界とは何の関連もないかの如く展開される我国の文献載録神話にも、其の各構成要素の創作伝承に与った人々の人間臭を感じさせるもののあることを知ったのであるが、次には同じイザナキ・イザナミ二神の神話中より、我国未開人の習俗を反映していると見られる物語構成要素を採り出し、それが其の神話創作者たちに、如何なる意義を有したものであるかを考えてみることにしたい。

*　　*

記紀の神話構成では、黄泉国訪問の後、イザナキ神が身の汚れを除くため、筑紫日向之橘小門之阿波岐原（記）、筑紫日向小戸橘之檍原（紀一書の第四）で禊祓（祓除）をしたとされている。

此れまでの記紀の注釈家や神話研究者たちは、何故か此の部分を考察の対象とした場合、其の場所が何処であるのか、檍とは如何なる植物であるのか、という事の解明ばかりに力を注いできたのであるが、私は此の場所が、福岡県那珂郡・宮崎県宮崎郡の孰

れか、或は更に別の土地なのか、檍が橿・みそはぎ・青木の孰れであるのか、といったようなことは、解明して無益であるとは言わないまでも、此の禊祓(祓除)という神話構成要素を産み出した人々の習俗や思想を理解することには、何の役にも立たないことと思う。大切なことは、此の神話構成要素を創作した人々にとって、其処が如何なる場所と考えられていたのかということである。

私は、此の場所が古代の人々――特に此の禊祓(祓除)の神話を産み出した人々――の間では、固有名詞的に理解されていたのではなく、宣長が檍原を「松原檜原柳原柞原(マツバラヒバラヤナギハラハハラ)などの類にして、たゞ此ノ木の多く生(オヒ)たる地(トコロ)を云るなる」[註34]と解した如く、橘や檍の繁茂する場所と考えられていたものと思う。即ち、文献載録神話で見る限り、其処は恰も特定の場の如くであるが、本来は其処彼処に普通に見られる土地であり、特に他と異なる点といえば、橘或は檍が生育していることぐらいだったのではないだろうか。

此の地名中の橘や檍は、未開文明の区別なく広く世界に、河川海潮に汚穢除去の効力ありとする思想の見られることや、禊祓(祓除)の記事に、「於是詔之、上瀬者瀬速、下瀬者潮弱而、初於二中瀬一堕迦豆伎而滌時……」(記)、或は、「濯二之於中瀬一也」(紀一書の第四)、また「沈二濯於海底一」(同上)などとあることから、橘=立花即海波飛白、檍=阿波+和岐即波浪湧の如き解釈をされたり[註35]、或は「要するに潮流の速い瀬戸を意味するのである」[註36]という如く、全く無視されてしまうのであるが、私は此れらを紀の表記する文字通りの植物と解し、此の神話を産み出した人々の間に、汚穢除去と橘・檍と密接な関係ありとする思想が存在したと考えたい。

我国古代人の間で、或る種の植物は邪気汚穢を払拭するに効能ありとされていたらしいことは、我国や隣邦中国に現在も行なわれている民間習俗或は文献上の記録から窺い知ることが出来る。中国には、古来蓬や菖蒲の如き植物が邪気汚穢を払うに有効なりとする思想があり、其れが端午の節句の風習と共に我国に伝わっていることは周知の事であるが、此の他にも、癩の伝染を防ぐに榕樹の緑の小枝が有効とされたり[註37]、人が死者の出た家を訪問する際には、衣服の下に大蒜を忍ばせる風習があったという[註38]。我国でも例えば、大阪住吉神社の田植え祭りに、菖蒲を付けた花笠が用いられるが、其れも菖蒲が田の厄払いの役目を果たすのだという[註39]。また皇室では皇子誕生に際し、桑の弓蓬の矢で天地四方を射つつ其の身の安全と長寿を願ったことが記録に見える。

中国には此の類の風習が非常に多く見られ、其の邪気汚穢を払う植物が多く薫り高いものとされていることを考えると、邪気汚穢払拭の呪力は、本来植物其のものにあったのではなく、或は其の香気にあったのではないかとも考えられるのであるが、孰れにしてもイザナキ神による禊祓(祓除)の場に、地名の一部としてではあるが、橘・檍の見られることの背後には、叙上の如き中国起源の思想や、不具児としてのヒルコを葦船に載せて流すという思想と、一脈通ずるものがあったものと思う。我国古代人にとって、河海のみが身に付着した邪気汚穢を除去する処ではなく、植物を用い、或は其れに触れる事で汚れを払うことが出来、更に一歩進めて考えるならば、橘の檍原の如き、植物の青々と繁茂する土地其

のものが、清浄回復に効能ある場であったのではないだろうか。

植物が邪気を払うということで思い出されるのは、黄泉国でイザナキ神により投擲され、黄泉軍を撃退した桃の実であるが、此れが樹木果実共に邪気撃退に効能ありとされたことは、我国中国に見られる種々の民間伝承・行事により知ることが出来、また此の思想が中国起源のものであることは今日では明白な事とされている。或る種の植物が邪気汚穢を払うという思想も、恐らくは此の桃の場合同様、中国から伝播してきたか、或は日本民族の先祖の一部が日本列島に移住して来る際に、大陸より将来したものであろう。そして此の思想が、河川海潮による汚穢の除去という風習と結びついて、イザナキ神の黄泉国訪問譚に続く禊祓（祓除）のモチーフとして神話に採り入れられ、最後に今日私たちの眼にする文献載録神話中のイザナキ・イザナミ神話の構成要素の一となったのであろうが、何時の頃からか此の部分では、禊祓（祓除）による神々の誕生ということもあって、河川海潮による汚穢除去の方にのみ研究者の眼がいき、其の場で橘・檍の果たしている役割りが無視されてしまうという事態を招いたのであると思われる。

記紀に、人間を指表する語として、青人草（蒼生）という言葉がある――此の語は、普通人間の数の増加する様子と青草の繁茂する状態を関連付けることにより生じたものと解されているが、私は其れが神話の世界に於ける人類の誕生と関りのある語ではなかったか、我国の文献載録神話には、原初に於ける人類の出現が語られていないが、古く我国には人間が植物より、或は植物を創造主が用いることにより、出現したとする神話があったのではないかと考えている――が、或は此の言葉なども、何処か遠い所では、植物が邪気汚穢を払うという思想と一脈の繋がりを持っていたのかも知れない。

何度も言うように、我国の文献載録神話は、口承文芸一般の性質として、其の伝承の間に種々の変改がなされると共に、所謂国家神話編纂の段階に於いて、かなりの意識的改竄の手が及ぼされているのであるが、其の構成を仔細に眺めると、私たちは其処彼処に神話の原作者たる一般民衆の日常生活や風俗習慣・思想の反映を見出すのである。イザナキ神の禊祓（祓除）も、神的存在態の行為として描写されてはいるが、此の神話が創作された時点に於いて、禊祓（祓除）は、其の創作者たちの間で日常行われていたことであり、其の際に、海浜河辺等水量の豊富な場で其れが執行されると同時に、或る種の植物の生育繁茂する場も其れに当てられることがあり、其の植物と汚穢払拭の関係が、私たちの眼にする神話の地名の中に、橘・檍という形で残り、今日に伝えられたものと私は考える。

＊　＊

古代の民衆が、自分たちの日常生活・風俗習慣等の体験を基盤に創り出した一個の物語――其れは未だ神話の名称を用いるにはあまりにも単純素朴・断片的なものであっただろう――が、其の口承伝達の間に主人公たる登場人物を超自然的存在態へと昇華させ、それと同時に其の周囲に存在した他の民間伝承を次々に摂取しつつ成長し、何時の頃からか其の登場主体に然るべき名称を与えられ、文献に記載されることによって其の構成上の成長変化を

止められ、最後に系譜型神話編纂者の手により、他の神話群と接合されると同時に、編纂意図に沿うよう改竄され、今日私たちの眼にする神話となったもの、其れが此処で其の二三の部分について考察を試みてきたイザナキ・イザナミ二神を登場主体とする神話なのである。

私たちは、イザナキ・イザナミ二神の名義・実体及び二神神話の構成要素たる交道学びや禊祓（祓除）を考察することにより、些かの淀みも見せずに物語を展開させる我国の文献載録神話にも、南方東南アジアや中国大陸より伝播した思想、それも単に文献から得た体験を伴わぬ知識ではなく、古代人の生活に根底を置く体験的知識としての思想が見出されること、更には其の中に、神話の名を冠せられる物語でありながらも、其れが所詮未だ人智の開けぬ民衆の間で生れたものである故に、非常に人間的なものを感じさせる要素のあることを知り得た訳である。

我国の文献載録神話は、一見民衆とは無縁のものであるかの如き観を呈しているが、イザナキ・イザナミ二神の神名や其の実体、及び此の二神による種々の行動、孰れを採って見ても明らかなように、其れは古代民衆の生活経験・風俗習慣を反映させたものであり、本来の姿は決して其れ以上のものではなかったのである。

註

1　忌部正通著『神代巻口訣』

2　イザナキ・イザナミを誘った男女と解するものは、此の二神の名義を云々する説のうち最も多く、そのうち主なものを挙げると次のようである。本居宣長著『古事記伝』三之巻。富士谷御杖著『古事記燈』及び『古事記燈神典』。平田篤胤著『古史伝』二之巻。橘守部著『難古事記伝』巻第一及び『稜威道別』巻三。多田孝泉著『略解古事記』巻第二。敷田年治著『古事記標注』上巻之上。玉木正英著『玉鉾集』巻之二。佐藤信淵著『天之御柱之記』。飯田武郷著『日本書紀通釈』壹六〇頁。飯田季治著『日本書紀新講』上巻二四頁。堀秀成著『神名考』二三頁。佐々木喜山標註「古事記」――加藤咄堂編『国民思想叢書』国体篇上二八二頁。久保季茲著『古語拾遺講義』。中島利一郎著『東洋言語学の建設』一三七頁。加藤玄智著『神道の宗教発達史的研究』四三頁。大槻文彦著『大言海』。次田潤著『古事記新講』二六頁。尾崎暢殃著『古事記全講』三〇頁。武田祐吉著「淤能碁呂島（古事記）」――『国文学　解釈と鑑賞』第一巻第二号一頁。大野晋著「記紀の創世神話の構成」――『文学』第三三巻第八号九二頁。J. W. T. Mason, The Meaning of Shinto, p.53.

3　金沢庄三郎著『日鮮同祖論』二〇三－二〇四頁。（全文に傍点あり）

4　新井白石著『古史通』巻之一。

5　松岡静雄著『日本古語大辞典』語誌一五五頁。此の説は同氏の『紀記論究神代篇二諾冊二尊』三三－三四頁にも見られる。

6　松村武雄著『日本神話の研究』第二巻一五四－一五六頁。

7　北畠親房著『神皇正統記』

8 中島利一郎著前掲書二三－二四頁。
9 安田徳太郎著『人間の歴史4』二九七頁。
10 与世里盛春著『大和民族の由来と琉球』九五頁。
11 溝口駒造著『日本古史典の再吟味』二一九頁及び「神宮鎮座以前に於ける古伊勢の神々」――『神道学雑誌』第二号一六六－一六七頁。
12 池辺真榛著『校訂古語拾遺新註』二之巻。
13 井口丑二著『高天原は近江なり』九一頁
14 呉来安著『古事記通玄解』巻一。
15 福士幸次郎著『原日本考』一五二頁。
16 北里闌著『日本語の根本的研究』五八頁。
17 原田大六著『実在した神話』二〇六頁。
18 城戸幡太郎著『古代日本人の世界観』九二－九三頁
19 松村武雄著前掲書一五六頁。
20 沼沢喜市著「南方系文化としての神話」――『国文学　解釈と鑑賞』第三〇巻第一一号一六頁。松村武雄著「比較神話学上より見たる日本神話」――『国学院雑誌』第二八巻第一号一七－一八頁及び『日本神話の研究』第二巻一六六頁。中山太郎著「果樹賣」――『民俗芸術』第二巻第一号五三頁。加藤玄智著前掲書四三頁。
21 安田徳太郎著前掲書二九七頁。与世里盛春著前掲書九五頁。
22 S＝H＝フック著・吉田蕃訳『オリエント神話と聖書』三二頁。
23 拙稿「イザナキ・イザナミ神話の冒頭部を如何に解するかということについて」――『国文学研究』第三九集五頁。
24 松村武雄著前掲書二三五頁。
25 臨時台湾旧慣調査会第一部『蕃族調査報告書』――阿眉族――二四三頁。
26 台湾総督府蕃族調査会『蕃族調査報告書』――大么族後編――一三頁
27 臨時台湾旧慣調査会第一部前掲書――紗績族――二頁。
28 佐喜真与英著『南島説話』四－五頁。
29 同上書五頁。
30 鈴木重胤著『日本書紀伝』五之巻に引く伊勢人松浦某の報告。（全文に傍点あり）。
31 ジェー・バチェラ著『アイヌ人及其説話』(上) 九五頁
32 吉田巌著「アイヌの動物説話」(一)――『郷土研究』第一巻第一一号三三頁。
33 J＝P＝マードック著・土屋光司訳『世界の原始民族』上巻一〇一頁。
34 本居宣長著前掲書六之巻。
35 呉来安著前掲書巻二。
36 次田潤著「古事記日本書紀研究」――『日本文学講座』第一巻四三頁。
37 デ・ホロート著・清水金二郎・荻野目博道共訳『中国宗教制度』第一巻四三頁。
38 同上書三一－三二頁。
39 上山春平・梅原猛共編『シンポジウム日本と東洋文化』一八七頁。
40 折口信夫著「年行中事」――『折口信夫全集』第一五巻八四頁。和歌森太郎著『日本民族史』七四頁。